学習意欲や活動意欲を高める授業づくりの工夫
ー子どもの実態に合った教材の開発と活用を通してー

教育実践研究科　教職実践専攻　教職実践基礎領域
西　大介

1　はじめに

平成２０年に新しい学習指導要領が告示され、小学校では平成２３年度に、中学校では平成２４年度から完全実施となる。従来同様に、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが重要視されている。さらに、学力の重要な３要素(①基礎的・基本的な知識・技能、②これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度)が具体的に明記された。また、改訂に伴い学習指導要領の方向性も見直され、７つの基本的な考え方が中央教育審議会より示された(注１)。その中の一つに『学習意欲の向上や学習習慣の確立』という項目が挙げられている。

このように、新しい学習指導要領においても「生きる力」を育てるために、その根底となる自ら学び、自ら考える力、すなわち『学ぶ意欲』が重視されている。

前回の学習指導要領においても「生きる力」を育むことが重視され、学校現場においては「生きる力」を育む観点から、子どもたちの学ぶ意欲を高めるために様々な工夫や努力が行われてきた。これらの取り組みにより、平成２２年度の全国学力・学習状況調査によると、「学習に対する関心・意欲・態度」が前年と比べて増加傾向にあるという結果が出ている(注２)。

約１年半お世話になったサポーター校や教職大学院での様々な実習校でも、教科学習をはじめ、特別活動などの時間において、先生方が子どもたちの学ぶ意欲を高めるための様々な工夫や努力がされていた。

こうした調査結果や実習等の経験から、子どもたちの学習意欲や活動意欲を高めることの大切さを実感したとともに、そのためには教師の工夫や努力が必要不可欠だということも考えさせられた。子どもたちの学ぶ意欲を高めるためには、子どもたちにとって授業が日々楽しく、興味深いものである必要がある。学校の授業が楽しくなければ児童生徒の学習意欲もわかず、結果的に学力も向上していかないだろう。

そこで私は教職大学院での２年間で、子どもたちの学習意欲を高めるには、どのような手立てが必要であるのか考えてきた。そして、子どもたちが生き生きと楽しみ、自ら学びたいと思えるような授業ができる教師になりたいと強く感じた。

2　主題設定の理由

(1)教材の果たす役割

山口満は、「教材は教師と学習者を媒介する働きをするというところに本質があり、教師の教授活動と学習者の学習活動が教材を媒介にして一体化されることになる。教師が授業を通して学習者に学力を習得させ、伝えたい教育内容、文化的価値は学習者の興味や意欲を喚起し、学習活動の対象として最適な形にして具体化される。教材は授業を構成する要素として授業の成立と展開に中核的な役割を果たす。」と述べている(注３)。

私は当初、子どもの学習意欲を高めるには、発問や指示などの教師の言動だけにしか大切さを感じていなかった。また、教材とは「子どもたちに物事を教えるためのツール」という漠然とした概念でしか捉えていなかった。

しかし、こうした教材論の著書や、学校現場での先生方の教材の活かし方と子どもたちの反応を目の当たりにして、子どもたちの学習意欲を高めるには、教材の存在が極めて大きいのではないかと考えた。

また、これらのことから、教材の工夫一つで授業の良し悪しだけではなく、子どもたちの進んで学ぼうとする気持ちや態度も育むことができるのではないかと考えた。

(2)子どもの実態に合わせた教材開発の重要性

有田和正は「教材の良し悪しが授業に大きく影響する。子どもの実態にマッチしたおもしろい教材を発掘できたとき、授業は成功したも同然である。逆に教材が悪ければ、授業にならない。」と述べている(注４)。

開発した教材そのものに時間や労力を費やしたとしても、教材が子どもの実態に合っていなくては、子どもの意欲や興味は喚起されず、学力の定着にもつながらない。子どもの学習意欲がわかないのは、教材と児童生徒の実態とが離れているからである。

このように、子どもの学習意欲を喚起するためには、教師がどれだけ子どもの実態を把握して、それに合った教材開発をすることが出来るのかが重要となる。

教師力向上実習ⅠⅡⅢでは、それぞれ小学３年生、小学校１年生、中学校３年生の学級に入り、年齢の大きく違う児童生徒に対して授業を行わせていただいた。当然、小学校１年生と中学校３年生とでは同じ教材を使う事は難しい。教材は教師と子どもを繋げ、教育内容を子どもたちに具体化して習得させるためのツールなのである。子どもたちの実態を考慮した「教材」の開発と活用のあり方は、授業の内容を左右するうえできわめて重要な意味をもつと考える。

3　教材の開発と活用の視点

(1)教材の開発と活用における基本的な考え方

教材を開発するにあたって、大切にしなければならないのは、「教育的意図」である。それは、子どもにどのような学力を育成するのか教師が明確にしておくことである。この授業において、どのような働きを教材に期待するのかということを教師は考慮した上で、開発・活用しなくてはならない。

また、開発した教材を授業の中で適切に位置づけ、効果的に提示し、活用することが大切である。「何のための教材なのか」ということを常に意識しながら教材を活用し、学習内容を身に付けさせ、どの子どもにも授業の目標を達成させることが出来るようにしたいと考える。

(2)教材開発の方法

①子どもたちの実態を把握する。

教材を開発するにあたり、子どもたちの実態を教師が把握しなくてはならない。そのための手段として、以下のように大きく３つあると考える。

ア、主に、授業での子どもの発言やノートなどを観察、または個別指導することを通して、一人ひとりの学力を把握する。

イ、休み時間や給食、掃除などの学校生活の中で実際に子どもたちと教師がかかわることを通して、一人ひとりの性格や、何に興味・関心があるのかを把握する。

ウ、アンケートをとり、授業や活動のねらいに対して子どもたちがどのように考えているのかを意識調査する。普段子どもとのかかわりでは見せない素直な気持ちとして表れるので、これも子どもたちの実態把握の手段として利用する。

主にこの３点の方法で子どもたちの実態を捉える。また、その他の手段として、担任の先生や学年の先生方にお話を伺うなどして情報を集めて実態把握に努める。

②活動のねらいを明確にする。

教科指導をはじめ、学活や道徳の時間などの活動を行うには、その活動のねらい(目標)を明確にする必要がある。教材は、ただ子どもたちに興味を持たせる道具ではなく、最終的にその教材を通して、知識・技能を習得させるためのものである。

１時間の授業で、身に付けさせたい目標を明確にし、この目標に達するための手段として教材開発に取り組むことが大切である。

4　教師力向上実習Ｉの実践(小学校３年生、学級活動)

(1)実践のテーマ

「自分や友だちを認め合える学級づくり
～良いところ見つけ・学級掲示の工夫を通して」

(2)学校の実態(安城市立梨の里小学校)

梨の里小学校は保健・体育を中心に取り組んでいる研究校であり、体を動かす活動を多く行っている。縦割り交流でダンスを行う梨ロビクスや、クラス対抗の８の字跳び大会・ドッチボール大会などある。このような様々な行事を通して、児童同士の豊かなかかわり合いの中から、他者を敬う気持ちや思いやりの気持ちが一人ひとりに育まれているのではないかと思う。

開校６年目の新しい学校を、地域全体で支えていこうとする姿勢がとても強い。スクールガードや読み聞かせなどのボランティアの方々の協力など、学校と地域との連携がしっかりとされている。また、学校に対する地域の信頼・期待も非常に高いと感じる。

(3)児童の実態(３年１組)

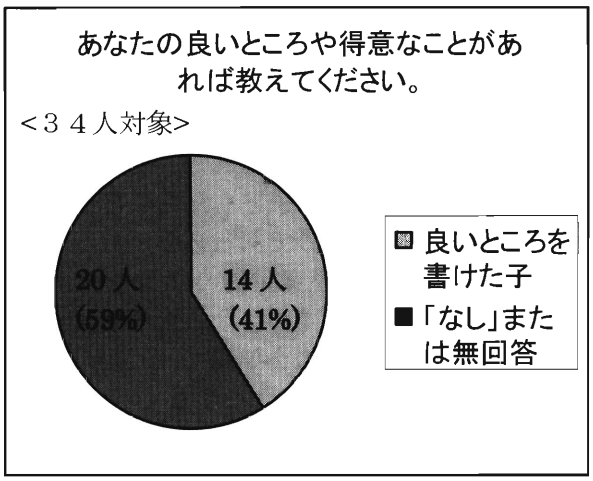
３年１組はとても明るく元気な児童が多い。男女共に仲もよく、みんなで元気に外を走りまわる姿が見られる。また、絵を描くことが好きな子も多くみられ、雨の日はキャラクターのイラストを書き合って楽しんでいる。人を傷つけるような言動もなく、思いやりを持った子が多いクラスである。

また、様々な学校行事や他学年との交流も多く、児童たちは豊かな経験と多くの人との出会いを経て、新たな自分を発見したり、自分を見つめ直したりするきっかけとなっているだろう。

教師力向上実習Ｉ初日(4月 11 日)に３年１組の児童３４人を対象に「良いところみつけ」についてのアンケートを実施した。以下、これに関する項目を抜粋した。

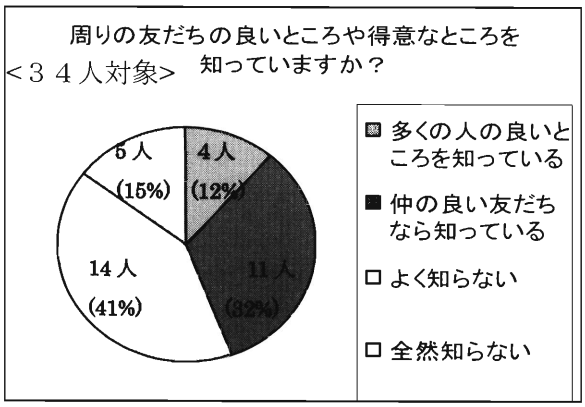
①あなたの良いところや得意なことがあれば教えてください。

資料１　質問：良いところや得意なことを書けた児童と書けなかった子の割合



②あなたは、まわりの友だちの良いところや得意なところを知っていますか？
〔多くの人の良いところを知っている・仲の良い友だちなら知っている・よく知らない・全然知らない〕

資料２　質問：まわりの友だちの良いところや得意なところをどれ程知っているかについての割合



質問①②の結果から、自分が頑張っていることや良いところや、友だちの良さを意識している児童がまだ少ないことがわかる。そこで、自分や相手の良さを見つけ、認める気持ちをさらに高めることが必要だと感じた。子どもたちにとって、自分の存在を認めてくれる周りの人々が増えたり、自己肯定感を高めたりすることが出来れば、さらに居心地のよい、安心できるクラスになると考えた。

（４）ねらい（目指す児童の姿）

友だちの良いところを見つける活動を通して、自分や友だちを認めようとする意欲を高め、相手を受け入れる心や思いやりの心を育む。

（５）ねらいに迫るための手立てと教材の活用

①自己紹介カードの掲示

自分の似顔絵といいところを書くスペースを設けたカードを書かせ、廊下に掲示する。

＜教材＞

ア　自己紹介カード（みんなキラキラ）

３年生になり、クラス替えが行われたため、自己紹介カードは新しい友だちに対して、自分を知ってもらい、相手を知るためのツールとなる。また、常に掲示しておくことで、休み時間などに児童が目を向け、みんなと一人一人の良さを共有することができると考えた。

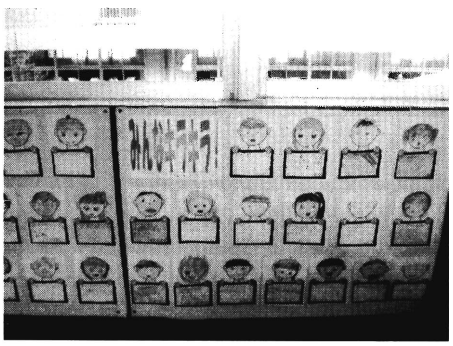


写真１　みんなキラキラの掲示物

②「良いところみつけ」の活動

友だちの「良いところ見つけ」として、教室の一角にポストとカードを設ける。児童たちが日々の学校生活の中で友だちの良いところを見つけたら、カードに書いて気軽にポストに入れられるようにする。そのカードを、帰りの会に「今日の良いところみつけ」として児童が何通か紹介する。カードは、毎日形にして残るように、「キラキラの木」という掲示物にそのカードを貼って、児童がいつでも見られるようにする。

＜教材＞

ア　カードを入れるポスト（ポストくん）

キャラクターが好きな児童が多いので、ただのポストとするのではなく、『ポストくん』という名前をつけてキャラクター化した。子どもたちに愛着を持たせて活動意欲を高められるのではないかと考えた。

写真２　ポストくん

イ　カードを貼っていく木の掲示物（キラキラの木）

毎日、子どもたちが書いたカードを掲示しておく。カードをキラキラの木の実と見立て、だんだんと木が成長していくようにする事で、子どもたちも活動を行った成果や達成感を味わえるように工夫する。見やすいところに掲示することで、子どもたちが何気なく見られるようにした。

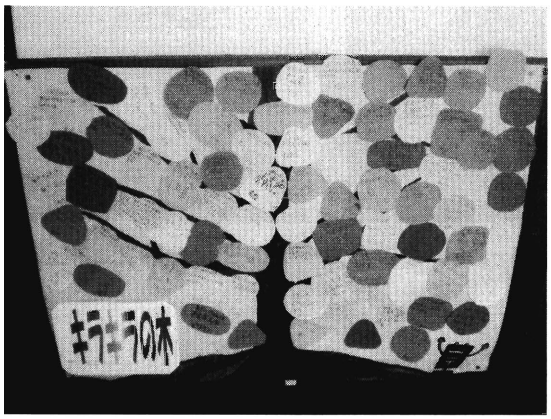


写真３　キラキラの木

（6）活動の実際

①自己紹介カードの掲示

自分の似顔絵はすぐ描けるものの、自分の紹介を書く場面では、自分の良いところをなかなか書けない児童も多数いた。個別指導を行い様々な視点を与えて、やっと書けた児童も少なくなかった。

実際に掲示してみると、児童たちは休み時間等を利用して掲示物を眺めるようになった。

②「良いところみつけ」の活動

児童は、マスコット化したポストと良いところカードに興味を示し、積極的に「良いところみつけ」に取り組むようになった。休み時間や給食の空き時間を利用して、カードを自分の席に持ってきてカードを書く児童の姿が多く見られた。一週間を過ぎるとカードを書く児童が決まってきたが、あまり書かなくなった児童も「キラキラの木」を定期的に眺めており、活動に対する興味は持続されていた。

帰りの会での「良いところみつけ」の紹介では、意欲的に発表する児童が決まってきたので、教師が良いカードをあらかじめ選んでおき、普段発表しないような児童も指名した。

初めのうちは、「○○くんは脚が速い」や「●●さんは絵がうまい」など、短い文が多かった。そこで、帰りの会の「いいところみつけ」の紹介時に、教師が良いカードの例を取り上げ、書き方についての指導をした。すると、「いつ」「何をしていて」「どう思った」など、児童同士のかかわりを詳しく書く児童も増えてきた。その時の出来事を詳しく書かせることで、子どもたちも書く内容の幅が広がり、具体的で長い紹介文が書けるようになってきた。

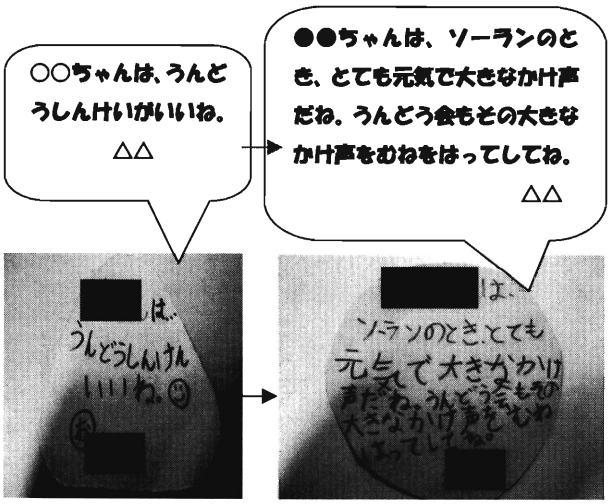


写真４　良いところカードの変化の写真　指導前と指導後(同じ児童)

（7）教材の成果と課題

①自己紹介カード

＜成果＞

子どもたちは掲示物に興味を示し、休み時間などに友だち同士で見合っている姿が見られた。自分と共通の特技や良さを見つけて親近感を得たり、新しい友達の一面を知ることができたりしたという児童の声もあった。

このように、この掲示物を通して、児童たちは友だちと交流し、新たな人間関係の形成に役立てていたのではないかと感じる。

＜課題＞

初めのうちは児童たちも興味を示してが、だんだんと見る児童も少なくなってきた。その理由としては、掲示した後に教師としての働きかけが出来なかったからだと考える。ただの「飾り」として終わるのではなく、もう少し「良いところみつけ」に活かすことができる教材として、教師の働きかけができればよかった。

②カードを入れるポスト(ポストくん)

＜成果＞

キャラクター化して親しみを持たせることで、子どもたちの活動意欲が高くなったと感じた。普段の学校生活の中でも子どもたちから「ポストくん」という声も聞こえ、子どもの活動意欲の持続に繋がったのだと感じた。

＜課題＞

①の自己紹介カードの課題同様に、ポストくんも日が経つにつれて多少存在が薄れていった。これもまた、教師の働きかけがさらにあることで、児童の活動意欲が高まったのではないかと感じた。例えばカードの目標枚数を決め、それを超えるとポストくんからのご褒美を上げるなどの取り組みが考えられる。このように、キャラクターの存在を有効活用して子どもの活動意欲を維持する取り組みがさらに出来れば良かった。

③カードを貼っていく木の掲示物(キラキラの木)

＜成果＞

初めに用意した掲示物が、カードですぐ埋まったので、新しく２枚目の掲示物を作った。児童たちはキラキラの木が更に大きくなっていく様子をとても喜んでいた。みんなのカードを貼っていくことで、キラキラの木が、日に日に大きくなっている様子がわかるようにしたため、児童も楽しんで取り組めたと感じた。

＜課題＞

今回の実践では、キラキラの木に良いところのカードをランダムに貼って掲示していたので、自分のカードが何処に何枚貼ってあるのかが分かりづらくなってしまった。もっと見やすく掲示するために、一人一人のスペースを設けて、自分が何枚書いたのか、または書いてもらったかのかが分かるようにし、達成感を感じさせる工夫も必要であった。

「キラキラの木」が満開になることで、クラス全体としては達成感を与えることができたが、一人ひとりが個人の達成感を与えられるような掲示の仕方も今後

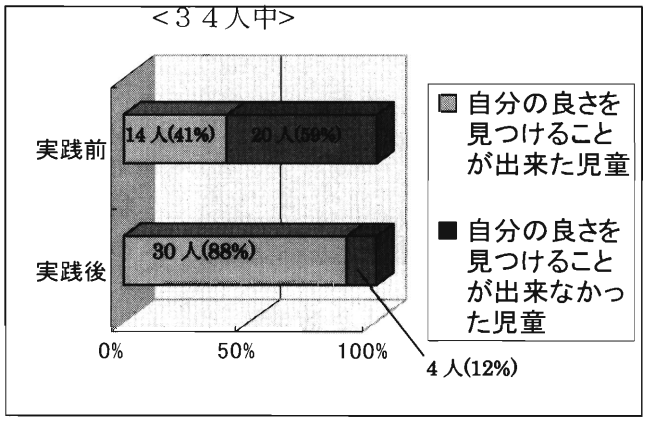
工夫する必要がある。

(8)実践全体の成果と課題

教師力向上実習Ⅰ最終日(5月6日)に3年1組の児童34人を対象に「良いところみつけ」についての振り返りアンケートを実施した。

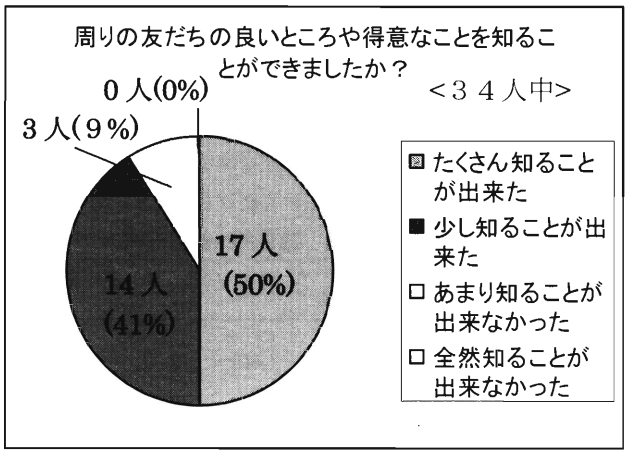
①あなたは自分の良いところや得意なことはありますか?または、この一か月で新しく自分の良いところを見つけることができましたか?

資料3　自分の良さを見つけることが出来た児童の割合(実践前・後の比較)



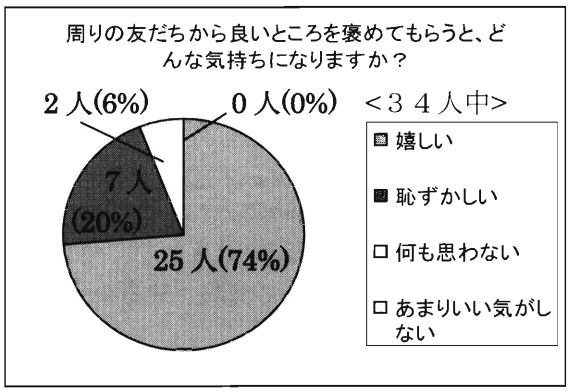
②周りの友だちの良いところや得意なことを知ることができましたか?
〔たくさん知ることが出来た・少し知ることが出来た・あまり知ることが出来なかった・全然知ることが出来なかった〕

資料4　周りの友だちの「良いところみつけ」をどれだけ出来たかについての割合



③まわりの友達から良いところや得意なところを褒めてもらうとどんな気持ちになりますか?
〔うれしい・恥ずかしい・何も思わない・あまりいい気がしない〕

資料5　周りの友だちから良いところを見つけてもらうとどんな気持ちになるかについての割合



①<成果>

質問①②③の結果から、以前のアンケートでは、自分の良いところや得意なところを答えることができなかった児童はクラスの半数以上もいたが、今回のアンケートでは4人までに減ったことが分かる。自分や他人の良いところを見つけ、お互いを認め合える児童が多くなったことが伺える。

また、自分の良さを褒めてもらうことに対して、「嬉しい・恥ずかしい」と素直な気持ちを答えた児童が多かったことから、自己肯定に対する抵抗はなく、自己や他人を認める事の良さを感じることが出来たのではないかと思う。

②<課題>

自主的な活動であったが、全員の児童が参加してカードを書いた。しかし、書いた児童や書かれた児童のカードの枚数の差が大きかった。カードに自分のことを書いてもらったことが少ない児童は、活動後のアンケートでも「自分のいいところは何ですか?」という質問に対して、「なし」と答える傾向が見られた。

このように、カードに書く活動に取り組めない児童やカードにあまり自分のことが書かれなかった児童に対して、教師としての支援が不十分であった。クラスの児童全員が取り上げられるように教師の方から働きかけることが必要であったと思う。

5　教師力向上実習Ⅱの実践(小学校1年生　算数「おおきさくらべ」)

(1)実践のテーマ

算数的活動を取り入れた体験学習を活かした授業展開　～視覚的・具体的な教材の活用～

(2)児童の実態(1年3組)

1年3組は、活発的で元気な児童が多い。一人ひとりの個性が強く、自分が思ったことや感じたことを素直に口にする児童が多いと感じた。

今回、授業実践の中心となる「大きさくらべ」の前単元である「20までのかず」も授業実習をさせていただいた。そこでは、1～20までの数や、その数の減法計算など、数を扱う内容を学習してきた。ブロッ

クや数字カード、具体物などを使った学習活動を多く取り入れたことにより、意欲的に参加し楽しそうに学習する児童が多く見られた。理解に時間のかかる児童や、授業に集中できない児童も具体物を操作することで興味をもって取り組んでいた。

「大きさくらべ」の単元においても、できるだけ多くの具体物を教材として活用し、具体的な操作活動を取り入れることで、児童の関心・意欲を引き出させるようにした。また、理解に時間のかかる児童に対しては、教師の説明が長くならないようにし、できるだけ視覚的・操作的な活動を通して理解させるようにした。

(3)ねらい(目指す児童の姿)

算数的活動を体験することで、大きさ比べに興味をもつとともに、その良さと測定の基礎を知り、進んで活かそうとする。

(4)ねらいに迫るための手立てと教材の活用

①身近なものを用いた測定

物の大きさ比べを行うにあたり、鉛筆や画用紙など、出来るだけ子どもたちの身近にある道具を用いて比較させた。長さを比べるには、「端をそろえる」ことが大切である。そこで、児童が比較しやすいように教材の大きさや色を工夫し、見やすいようにした。

＜教材＞

ア　画用紙で作った２本の鉛筆

画用紙で作った２色の大きな鉛筆を用意した。実際の鉛筆よりも、大きく見やすいため、児童にとって直接比較のポイントである「端を揃える」ということを視覚的に理解させやすいと考えた。

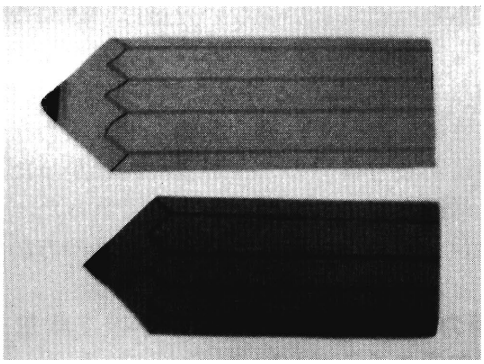


写真５　画用紙で作った鉛筆

イ　曲線状と渦状の毛糸

長さの違う２本の毛糸を写真６－Ａのように画用紙に貼り付けた。このままだとどちらが長いのか比較出来ないので、「端をそろえる」「真っ直ぐにする」という発想が生まれると期待できる。この毛糸は画用紙から外せるようにしてあり、真っ直ぐにして端を揃え、直接比較できるようになった。真っ直ぐ伸ばしても、毛糸の元の状態がわかるように、画用紙に元の毛糸の軌跡を書いておいた。こうすることで直接比較の良さが児童に伝わるのではないかと考えた。

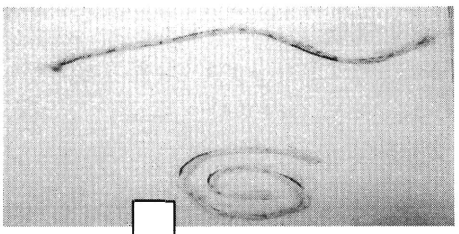


写真６－Ａ　違う長さの毛糸を曲線にして画用紙に貼り付ける。

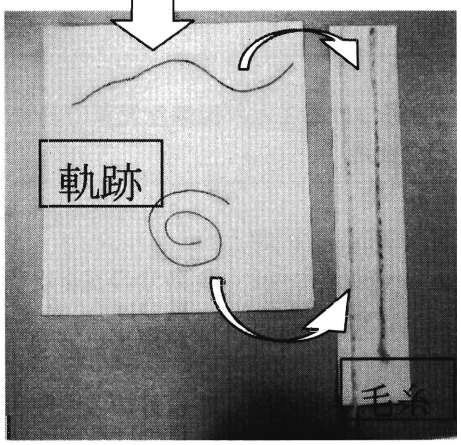


写真６－Ｂ　毛糸ははずせるようにして、直線にして長さ比べができるようにする。また、毛糸の元の状態と比較できるように軌跡も描いてある。

ウ　縦と横を色分けした画用紙

画用紙の縦と横の長さを直接または間接比較する。縦と横で色を塗っておくことで、比較対象が児童にとって見やすくなると考えた。一人一枚配り、個人の考え方を黒板に貼って皆に示すようにした。

(5)授業の計画

①単元名『おおきさくらべ』

②本時のめあて(１／４時間)

・　身の回りの長さに関心をもち、工夫して長さを比べようとする。 ・　直接比較や間接比較による長さ比べの方法を理解する。

③学習過程

学習活動	教師支援
1　「画用紙で作った２本の鉛筆」を提示し、どちらが長いか考える。	1　児童を指名し、実際に鉛筆の端をそろえるように操作させる。 なぜ端をそろえたり、まっすぐにしたりして長さを比べるのかを話し合わせる。
どちらがながいかくらべてみよう。	
2　隣同士で鉛筆の長さ比べを行う。 3　「曲線状と渦状の毛糸」を提示し、どちらが長いか考える。 4　「縦と横を色分けした画用紙」の縦と横の長さを比	2　「端をそろえる」「まっすぐに並べる」ことに意識して活動させる。 3　渦状と曲線状の毛糸を提示することで、このままでは比べられないことに気付かせる。 4　机間指導をして、比べ方に困っている児童には、１枚の画用紙を折っ

較する方法を考えて発表する。	たり、はさみなどを使ったりしても良いことを助言する。
5　本時のまとめとして振り返りシートを書く。	5　楽しく学習できたか、勉強がわかったかなどを書かせることで、次時への意欲を高める。

(6)教材の成果と課題

①画用紙で作った２本の鉛筆

＜成果＞

画用紙で作った鉛筆に対して児童たちはとても興味を示した。やはり、大きく作ったことが視覚的に児童たちの興味を引きつけたのだと考える。

また、２本の鉛筆の長さを比較する際に、わざとバラバラに貼り付けた。すると、児童から「えー、それじゃあ分からないよ。」などの声が聞こえた。「ではどうすれば比べることが出来る？」と問いかけることで児童たちは「端を揃える」「真っ直ぐに揃える」という視点に迫ることが出来た。

写真７　正確に比較するために鉛筆を揃える児童

＜課題＞

児童たちの方から「端を揃える」という言葉が出るのを期待しすぎてしまい、導入として時間をかけすぎてしまった。教えるべきところを教師が教えることで、スムーズに進められたと思う。

②曲線状と渦状の毛糸

＜成果＞

２本の毛糸の形状を見て児童たちは、今の状態だと比べることが出来ないということに気付いた。「どうしたら比べることが出来ますか？」と教師が問いかけると、児童が意欲的に意見を発表した。

また、実際に毛糸を伸ばして比べてみると、事前の予想とは違った児童が大半であり、「だまされたー」という声が聞こえた。こうした児童のつぶやきから、児童の予想を覆す教材は有効であるとわかった。

＜課題＞

毛糸が細く、画用紙も小さかったため、もっと大きくして児童にとって見やすく作るべきであった。

また、「端を揃える」という観点から、比較してみて端が揃っている様子が分かるように、端のところに印をつけるようにすると良かった。

③縦と横を色分けした画用紙

＜成果＞

児童たちは画用紙の縦と横の長さを様々な方法で比べていた。画用紙を折り曲げて直接比較したり、他の物を用いて間接比較したりなど、多様な考えが出てきた。

児童たちは、今までの生活経験から発想したり、新たに方法を考え出したりして、とても意欲的に長さ比べを行っていた。

また、縦と横で色を変えたことにより、児童たちもどこを比較するのかが理解しやすかったのではないかと感じた。加えて、児童の活動の効率を良くする点でも効果があったのだと思う。

＜課題＞

児童たちの様々な比較の考え方を、画用紙を使ってもっと板書に残しておく必要があった。今回の発表に対して、教師が予想した範囲内の考え方しか板書として残せなかった。多様な考え方を他の児童と共有させるために、もっと予想外の考え方も板書として残すことが出来れば良かった。

(7)実践全体の成果と課題

＜成果＞

本時では、単元の導入ということもあり、操作的な活動を中心とした授業を行った。

１時間じっと座ることの難しい発達段階であるため、出来るだけ手や体を動かせるようにした。すると、児童たちは活き活きと授業に参加し、活動するようになった。普段、なかなか授業に集中できない児童も、意欲的に活動したり、積極的に発表したりする場面も見られた。

このように、児童たちが実際に体を動かせる操作的活動を行うことで、学習に対する意欲が向上し、長さ比べの素地も養われたのではないかと考える。

＜課題＞

今回の実践では、活動に時間を取りすぎたため、まとめで児童たちに振り返る時間が十分に確保することが出来なかった。そのため、体験的な活動は多く取り入れたものの、児童たちの確かな学びへ繋がったのかが曖昧となってしまった。このような活動をただの経験で終わらせるのではなく、児童たちが最後に振り返りをして、そこから得た体験や学びを一般化できるような授業構成と時間配分が必要だと感じた。

６　教師力向上実習Ⅲの実践(中学校３年生　道徳「将来のために必要な資質(能力)とは？」)

(1)実践のテーマ

自分の生き方や在り方に明るい展望を持たせる道徳教育の実践～エクササイズ「重役会議」を通して～

(2)学校の実態(尾張旭市立西中学校)

西中学校の生徒たちは、きちんと挨拶ができ、生き生きとした学校生活を送っているように感じた。教師

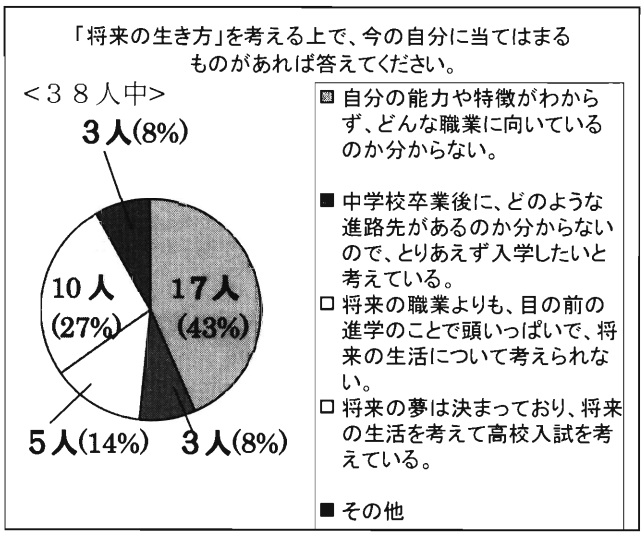
と生徒との関係も良好であり、休み時間や放課後の時間に、いろいろな話で盛り上がっている姿がよくみられた。このように、授業以外の時間も活用し、教師と生徒との信頼関係が出来ているように感じた。

(3)生徒の実態(3年B組)

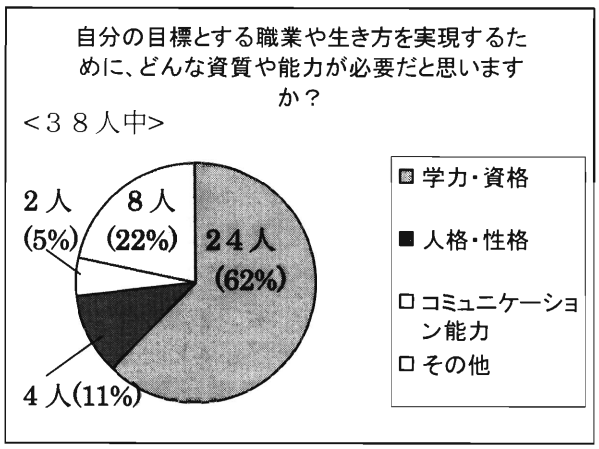
3年B組の生徒たちは、大変落ち着きがあり、思いやりのある生徒が多い。また、行事などに対しても、真剣に取り組み、みんなで協力し合えるような一体感のあるクラスである。期末テストも終わり、テストの結果から一喜一憂している生徒の様子から高校受験に対する思いも強く感じた。

教師力向上実習Ⅲの初日(11月21日)に3年B組の生徒38人を対象に「将来についてのアンケート」を実施した。以下、これに関する項目を抜粋した。

資料6　将来に対する生徒の考え方の割合



資料7　どのような資質や能力が必要かについての割合



資料6から、自分の将来についてまだ分からない、漠然としている子が半数以上いることがわかる。また、資料7から、学力テストの結果による学業成績が一番の関心事であり、学力や内申点を上げることが大切だと考えている生徒も多いことが分かった。

そこで、今後一人ひとりが将来にとって必要な資質や能力について改めて考え、学力だけでなく、意欲や人間性なども社会人にとって大切なのだと気付かせることが大切だと感じた。また、自分の良さや特技を見つけ、今後どうやって生かしていくのかについても考えるきっかけとなることが大切だと思う。

(4)ねらい(目指す生徒の姿)

一人ひとりが将来自分たちにとって必要な資質や能力について気付くとともに、自分の将来の生き方やあり方に明るい展望が持てるようにする。

(5)エクササイズ「重役会議」の取り組み

ある会社の重役会議を想定して、採用者人選の話し合い活動をグループで行う。その後、グループで話し合ったことを発表し、共有することで自分が将来に向けてどのような資質や能力が必要か改めて考えさせる。

(6)ねらいに迫るための手立てと教材の活用

<教材>

①重役会議

構成的エンカウンターグループの「重役会議」は、生徒たちが人を雇う立場になったと仮定して、どのような資質や能力を持った人が社会人として必要なのか考えることができるエクササイズである(注5)。

生徒は、採用者を選んだ理由をグループで討議して価値判断の妥当性を検討し合う。会社に必要な人材・資質とは何かを考えて深めることは、自分たちの将来に生きて働く資質や能力に気付くことにつながる。学力テストの結果などは将来に生きて働く資質の一部に過ぎない。それだけではなく、一人ひとりの個性はもちろん、夢や希望を持ち、それに向けて努力する姿勢や、それを支える人間関係能力も実は大切なものなのだ、ということを重役会議の活動を通して気付かせたい。

②個人表

5人の採用者の評価が記載されている資料である。学業成績はもちろん、面接での印象などの人間性なども表記されており、現実的な資料となっているため、子どもたちにとって新鮮かつ、とても興味深い内容だと考える。この資料をもとに自分だったらどのような人柄を採用するか考えるきっかけづくりとなると考えた(注6)。

(7)授業の計画

①主題　将来のために必要な資質(能力)とは？

≪1－(5)自己の能力・個性の伸長≫

②本時のねらい

会社の重役としての話し合い活動を行うことで、将来必要な資質（能力）に気づき、自分の生き方やあり方に明るい展望を持てるようにする

③学習過程

学習活動	教師の支援と留意点
1　職場体験のことを想起する 2　エクササイズ「重役会議」を	1　自分が体験した職場のことや、どんな仕事を実際にしたの

行う。 (1)会議設定の内容を知る。 (2)一人で検討する。 (3)重役会議を始める。 3　結果発表を行う。 【予想される判断理由】 ・学力が高い。 ・自分の個性を生かそうとする抱負がある。 ・社交性がある。 4　将来に生きていくために必要な資質(能力)について考える。 5　本時のまとめとして授業の感想を書く。	かを思い出させる。 2　机間指導では考えをもてない生徒に対して、まずは候補者の良いところに着目するように助言する。 3　高校受験を例に、自分たちが今度選ばれる側になるのだということを再認識させる。 4　指導者の話を聞き、将来生きていくために必要な資質(能力)は、「学業」だけでなく、「やる気・目的意識」や「人間関係能力」も必要であることを伝える。

(8)教材の成果と課題

①重役会議

＜成果＞

本時のねらいに迫るために、今の生徒たちの実態に合った教材だったと言える。

発表することが少ない中学３年生でも、とても興味を示して取り組む姿が見られた。その理由としては、高校受験を控えた生徒たちが今の自分たちの立場として置き換えやすい教材だったからだと言える。

＜課題＞

今回の授業では道徳というよりも、学級活動の要素が強すぎた。最後のまとめの時間で、本時の目標に繋げるために自分(教師)の想いを、無理矢理子どもたちに押し付けてしまった。もっと生徒たちの発言・つぶやきに反応して、生徒たちとのかかわりを大切にした方が良かった。

このように、教材を活用することで教師の思いを伝えるだけでなく、子どもの思いや考えを引き出すための教材の活用法も考えなくてはならない。

②個人表

＜成果＞

振り返りシートの感想の中に、「この個人票を見て、人材を選ぶ視点を知ることが出来た」というように、個人票を使ったことで生徒の興味の表れが見られた。

実際に人材を選ぶ際にどのような判断や基準で評価されているのかが分かるので、生徒たちにとって、とてもリアリティーがあり、価値のある教材となったと感じる。

＜課題＞

教材を、教師がどれだけ読み取り指導に生かせるのかが大切である。例えば資格記述欄に英検準１級と書いてある。「この資格を持っているとどれほどのレベルなのか」と生徒に聞かれたが、上手く答えられなかった。このように、教材をしっかりと読み取ることの大切さを改めて実感した。特に今回のような情報の多いものだと、それだけ生徒の反応も多種多様になってくる。教師はこれに対応し、指導として活かすことができるようにしなくてはならない。

(9)実践全体の成果と課題

①＜成果＞

生徒たちは授業に対して意欲的に取り組む様子が見られた。振り返りシートには、今回のエクササイズを通してこれからの自分について考えを書く欄を設けた。多くの生徒は、今の自分について足りない部分について考え、漠然ではあるが、「社会人になるためにこれからどのように自分を磨いていくのか」ということを書いていた。今までは、学力や知識が自分にとって大切と思う生徒が半数以上いたが、人間性ややる気など、それ以外にも必要な資質や能力が大切だと気付いた生徒が多く見られた。

女子生徒の感想から

「今回の授業で、採用する時に、成績よりも面接での様子や特記事項に注目した採用している人が多いなと思った。成績だけ良くても、普段の生活態度が悪いと、その人への評価は下がるのだなと思った。だから、私も受験へ向けて、生活態度を良くしようと思った。」

②＜課題＞

実践による成果の反面、今回の授業に対して今後の自分に置き換えることが出来ない生徒もいた。感想を書いた生徒の中には、「重役会議が楽しかった」や「こうやって人材は選ばれることが分かった」など、今回の活動を通した感想止まりの生徒もいた。そこから、今度は自分の立場になり、これから自分はどうしていきたいかと考えることができるように、振り返る時間を十分に設けるべきだった。

7　研究実践全体を通しての成果と今後の課題

(1)成果

①子どもの学習(活動)意欲と教材の関連性

三つの実習を通して、子どもの学習(活動)に対する意欲と教材の相互関連性を改めて強く感じた。

教材が、どれだけ子どもたちの興味や関心を引き出せるかによって、子どもの学び(活動)に対する意欲も変わってくる。子どもたちの興味や関心を引き出すことができる教材を開発したり、授業で活用したりすることの重要性を改めて実感できた。

特に、具体物を取り入れた教材に対する子どもたちの反応はとても良かった。活字ばかりでなく、視覚的に理解させる教材を活用することで、子どもたちの学びもより確かなものになるのだと分かった。

また、教材を通して子どもたちが自分の手や体を動かして実際に体験させる活動も有効であった。子どもたちの体験的な活動をより充実するための手段としての教材のあり方も実践を通して分かった。

②子どもの実態を捉えることの大切さ

教材をより効果的に活用するためには、教師が子どもの実態を掴むことが大切だということを実践を通して分かった。子どもたちの良さを活かし、足りないところを補うようにするための教材を選択することを特に心がけた。教師の目から見た子どもの姿や、アンケートから伺える個々の心情など、多面的に子どもを捉えることで、効果的な教材が出来るのだということがわかった。

(2)今後の課題

①学習(活動)意欲から確かな学びへ

今回の実践では、教材を効果的に活用することで、子どもたちの学習(活動)に対する意欲を高めることが出来たと思う。しかし、意欲をもって活動した子どもたちが、その時間で確かな学びが出来たのかを確かめることが出来なかった。子どもたちの意欲を高め、さらに基礎的・基本的な知識や技能を身に付けさせるための教材の開発・活用が今回の実践では課題として残った。

例えば、毎時間授業の最後に「振り返りシート」を用意し、子どもたちに学びの振り返りをさせたい。1時間の内容を整理し、復習することで活動から学んだことを定着させることが期待できる。

意欲や関心を引き出すための教材から、確かな学びが出来るための教材を開発し、活用することが私にとって大きな課題である。

②子どもの実際の姿で実践を振り返る

今回の実践では、実践前と実践後の子どもたちの変化を捉えるための手立てとして、アンケートを用いた。しかし、他にも子どもたちの変化を捉える手立てはあったのではないかと思う。例えば、教師自身の目で子どもたちの変化の様子を見るということである。向上実習Ⅰの「良いところみつけ」では特に、普段の学校生活の中から、子どもたちの変化の様子を捉える機会がたくさんあったのではないかと思う。子どもたち一人ひとりの変化の様子をしっかり捉えることが、教師の実践を振り返る大切な材料となるであろう。

学校生活の中で子どもたちは日々成長している。その中でどれだけ教師がアンテナを高くし、その様子に気付くことが出来るかが、今後の私の課題だと感じた。

8　おわりに

私は、子どもたちが「学びが楽しい」と思えるような授業が出来るような教師になりたいと思う。

また、教師の一番の使命は、子どもに学力をつけさせることである。私は、これまで大学院で学んできたことを活かし、「楽しい授業」はもちろん、「わかる授業」の実践にこれからも取り組んでいきたい。そのために、今回の実践のテーマとした「教材の開発・活用」に一層力を入れて取り組み、子どもの学びをより確かなものにしていきたい。

＜注記＞

(1)中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領改訂について」(2008年1月)

(2)文部科学省国立教育政策研究所「平成22年度　全国学力・学習状況調査【小学校】報告書」(文部科学省・2010年1月)

(3)日本教材学会　『日本教材学会設立20周年記念論文集　「教材学」現状と展望　上巻』　(協同出版・2008年11月)

(4)有田和正『教材発掘の基礎技術』(明治図書・1989年2月)

(5)新潟市立総合教育センター「新潟市立総合教育センター授業実践集」　※長嶋茂(石山中学校)の実践(「重役会議」平成17年度)を参考にした。(新潟市立総合教育センターHP www.netin.niigata.niigata.jp/)

(6)「個人表」注5と同様に長嶋茂(石山中学校)の実践(「重役会議」)を参考にした。

＜参考文献＞

(1) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領改訂について」(2008年1月)

(2)文部科学省『小学校学習指導要領解説　道徳編』(東洋館出版社・2008年6月)

(3)文部科学省『小学校学習指導要領解説　総則編』(東山書房・2008年3月)

(4) 日本教材学会『日本教材学会設立20周年記念論文集　「教材学」現状と展望　上巻』　(協同出版・2008年11月)

(5)有田和正『教材発掘の基礎技術』(明治図書・1989年2月)

(6)有田和正『子どもが生きる授業づくりの技術』(教育出版・1997年8月)

(7)新潟市立総合教育センター「新潟市立総合教育センター授業実践集」　※長嶋茂(石山中学校)の実践(「重役会議」平成17年度)

(新潟市立総合教育センターHP　www.netin.niigata.niigata.jp/)

＜付記＞大学院の実習は、以下の実習校でさせて頂いた。

〈学校サポーター　教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ〉

安城市立梨の里小学校

(鈴木一校長先生、宮田美智子先生、夏目順子先生)

〈教師力向上実習Ⅲ〉

尾張旭市立西中学校

(臼井隆校長先生、山下浩司先生、加藤明子先生)

尚、実習校では多くの先生方にご指導・ご助言をいただきました。お世話になりました全ての先生方に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱでご指導してくださった萩原孝先生、川北稔先生、実習Ⅲでご指導してくださった鈴木健二先生、また、修了報告書をはじめ、様々なことをご指導下さった萩原孝先生に、心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。